

第21回 日銀グランプリ決勝大会 審査員講評

審査員長 氷見野 良三（日本銀行副総裁）

審査員 山口 明夫（経済同友会副代表幹事^(注)、日本アイ・ビー・エム株式会社代表取締役社長）

淡路 瞳（株式会社千葉銀行 取締役専務執行役員（代表取締役））

野口 旭（日本銀行政策委員会審議委員）

中川 順子（日本銀行政策委員会審議委員）

（注）決勝大会開催時。2026年1月1日付で経済同友会代表幹事に就任。

1. 総評

皆さん、論文のご報告をありがとうございました。

国庫業務の効率化や日本銀行の情報発信の工夫、CBDC の災害への活用可能性、M&A の新手法の活用余地について、いずれも丁寧な調査・分析を行ったうえで、学生らしい視点で提案をいただきました。

特に分析にあたっては、AI などの技術を活用する一方で、地道なフィールドワークやアンケート調査を合わせて行うことにより、提案の実現性や課題を考察するなど、各チームとも説得性を高めようと努力していることが印象的でした。

審査員との質疑応答では、難しい質問もあったと思いますが、これまで蓄積した知識や経験を踏まえつつ、質問に真正面から向き合い自分の言葉で真摯に回答していただきました。皆さんのチームワークや代表者のリーダーシップを頼もしく感じたところです。

2. 個別の論文について

それでは、審査検討会での議論を踏まえた講評を、私が代表して述べたいと思います。

【最優秀賞】

同志社大学・政策学部チーム Chain Referral Program for e-Tax ～繋がりで波及させるキャッシュレス納付推進案～

同志社大学・政策学部チームは、金銭的インセンティブをベースに法人間の横のネットワークを利用した、国税のキャッシュレス納付、e-Tax 推進による業務効率化を提案いただきました。

これまでの日銀グランプリでは、実務的な色彩が強く、ともすれば学生には取っつきにくい分野である、日本銀行の「政府の銀行」としての役割をテーマに取り組んだチームが殆どなかったことを踏まえると、そのチャレンジ精神は評価に値します。

提案の制度設計に当たっては、過去のマイナンバーカードの普及促進事例の分析、地元企業や金融機関へのヒアリング調査などを行い、有効性を検証していました。

また、金銭的インセンティブやプラットフォーム設立の原資として、税金を使うことの重みを理解したうえで、社会的コスト削減額を費用便益分析により試算することで、提案の説得性を高めていた点も評価できます。

今後、キャッシュレス納付に踏み切っていない企業側の実情をより深く把握し、インセンティブの有効性や非金銭的なサポートの必要性など、検討を深めていくことが望まれます。

【優秀賞・特別賞】

東京大学チーム デジタル防災円（DPY）

東京大学チームは、災害時に特化したデジタル通貨の制度・技術設計を提案しました。「デジタル防災円」と称するCBDCの導入により、被災フェーズに応じた最適な経済支援を可能にし、災害レジリエンスの飛躍的な向上に貢献できるとしました。

災害時に特化したCBDCの活用という提案は、意欲的なアイデアであるほか、過去の地震災害の事例や日銀、ECB等の参考文献を研究し、専門家へのヒアリングも踏まえて、決済インフラの設計から法整備、市場機能の活用まで多角的に実現性を検討している点は、高く評価できます。

特に、デジタル通貨の持つプログラマビリティを活用して、災害後の復興フェーズに応じた用途制限や時限設定を柔軟に制御するといった実現性を高めるための解決策が盛り込まれていた点について、提案の独創性も含めて評価しました。

今後、避難所別の救援物資情報など被災地の他のデータと連携させる可能性や利用者のプライバシー確保について研究を重ねることで、提案の実現性を一層高めることが期待されます。また、民間企業によるステーブル・コインとCBDCとの役割分担について整理し、考察を深めてもらえればと思います。

【優秀賞・審査員長賞】

帝京平成大学チーム
「日銀文学」を超えて
～風を読む経済情報の可視化と発信改革～

帝京平成大学チームは、国民の声を「風」と定義し、日銀が一般市民にも届く平易で共感を呼ぶ情報発信をすることで、「風」を動かす役割も担うべきであると提案しました。

提案に当たって、過去10年の「物価上昇・インフレに関するSNS投稿」をAIで分析し、ポジティブ・ネガティブに分類することで、「風」の変化を可視化し

ました。展望レポートについても、「基本的見解部分」を読み込ませて、「タカ派・ハト派的記述」の変化を物価上昇率との相関も含め、分析しました。

AI を用いて SNS 投稿や展望レポートの記述の変化を分析する取り組みは、最先端技術の活用手法の提案として意欲的です。また、金融政策の意図やその前提となる金融経済の情勢判断を国民に的確かつ積極的に伝えることが重要であるとの指摘は、傾聴に値します。他国の中銀の取り組みを紹介しつつ、さまざまな情報発信の可能性を指摘している点も示唆に富んでいます。

今後、中央銀行から国民への情報発信の方策について、AI による分析も踏まえた独創性のある具体的提案が期待されます。また、情報の受け手のリテラシーやニーズの違いを踏まえて、よりきめ細かに方策を検討することも考えられると思います。

【優秀賞・ユニーク賞】

同志社大学・商学部チーム

M&A の新しいものさし

～企業 MBTI が示す相性マトリクス～

同志社大学・商学部チームは、企業の価値観や行動スタイルに着目し、性格診断ツールをベースにした、M&A の意思決定サポートツールを提案しました。売り手・買い手がこのツールを利用すれば、文化的な摩擦や人材流出リスクを事前に見極められるとしました。

企業文化を可視化し、相性を定量的に評価することで、統合に伴うリスクを事前に把握することができれば、M&A の意思決定に役立つものと期待されます。

「企業も、経営理念や働き方のスタイルに表れる組織風土、性格を有しており、この相性の一致が統合コストの最小化につながる」との問題意識は、独創性があるアイデアで、財務情報の開示が少ない中小企業も含め、このツールのニーズが高い可能性があります。

今後、実際に M&A を行った経験のある企業や金融機関などへのヒアリングを行い、実務家の意見を取り入れていくことで、M&A の実務プロセスにおける相性スコアの活用方法やその限界を検討していくことが期待されます。

3. おわりに

決勝大会進出チームの論文に関する講評は以上です。決勝大会に進む過程で得られた知識や、本日の報告、質疑応答などの経験を今後の学習に活かしていただければ幸いです。

日本銀行では、来年度も日銀グランプリを開催する予定です。多くの学生が、わが国の社会的課題や日本銀行の政策・業務に関心を持ち、仲間とともに調査分析を行って、論文作成にチャレンジすることを期待しています。

今回の提言は、組み立てがしっかりしていたり、粗っぽいが面白い提案があつたり、着想に独創性があるなど、それぞれ異なる素晴らしい所があったと思います。

以上